

教 仏 名 聞

第41号
(発行日)

2014年2月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

四 苦 八 苦 について

四苦八苦という言葉がある。これはもと仏教語であるが、四苦とは生苦・老苦・病苦・死苦の四つである。

生苦とは生まれる苦しみのことで、煩惱を抱えた身体をもつて誕生することによる苦である。身体をもつと、そこからいろいろな苦が起こってくるので、生まれることは苦であり、身体は苦しみの器である。

身体をもつて生まれ、これを「我とし我が身」と執着するところに様々な煩悩が起こってくることは疑いようがない。生まれも死にもしない不生不死のいのちの真実に到るのが、仏の教えである。

身体を我とし我がものとするところから、我が身の老いゆくことを嘆く、これが老苦。我が身が病気になる苦、あるいは病いになることに不安をいだく、これが病苦である。そして我が身への執着は、

死にたくないのに死なねばならない苦となり、死ぬことを恐れて生きる。これを死苦という。

このような四苦は、凡夫であり、我が身に執着するなら、だれしもこの四苦を免れない。四苦する私はまさに凡夫である。

八苦というのはこの四苦にさらに四苦を加える。すなわち愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦の四つである。

愛別離苦とは、愛している者と離れゆく苦しみである。好ましく愛しい状態が去っていく悲哀感なども広く言えば愛別離苦といえよう。

母との死別の悲しみは愛別離苦の典型であったが、小学生の修学旅行で、岡山県の田舎町から奈良・京都を巡って、すこぶる楽しかった旅行もいよいよ終わりに近づく中、夜の京都の街を走るバスの中で、外のネオンを見てい

るとあの「月はおぼろに東山」の歌が流れてきた。その時、「ああ楽しかった旅行も終わっていくのだなあ」というなんともいえぬ悲哀を感じたことを未だに思い出す。楽しければ楽しいほど、終わりになると悲哀の情が起こる。これらも愛別離苦に入るであろう。人生は大なり小なり別れゆく悲哀の連続である。

次の怨憎会苦であるが、これはうらみ憎む者とあわねばならぬ苦しみといわれている。自分を良く思っていない人とか憎たらしい人と、合ったり共に生活したり働いたりすることは、苦痛である。これも日常よくあることである。

私は、まだ人からひどい害

《 念佛寺永代経法要 》

四月二十二日(火)

午後二時始

講師 藤本千穂美師

*同日(四月二十二日) 午前十時・勤行

(念佛寺住職の法話です)

を受けた経験がないからだと思いが、人を憎むとか怨む経験が乏しい。(これからは分らないし、内因として潜在しているであろう)それで怨憎会苦という実感がどうもできなかつた。ところが金子大栄師著『雑華録』の中で、「それ(怨憎会苦)は、愛し得ざる悩みとも見ることができよう」と仰せられていた。このお言葉で「怨憎会苦」という内容がまさに自分の苦しみをよく言い当てて下さっていたと感じたのである。「人を愛しえざる悩みが怨憎会苦」となると、それなら私は怨憎会苦に悩みどうしであったと知らされた。

憎い人や恨みのある人がい

《住職雑感》

昨今、「浄土真宗は、真宗思想を原理として、それにのっとって行動し社会を変革していく、これが真宗人の生き方だ」とする話がある。たとえば四十八願の中の第一願は「たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ」であり、如来法蔵の願いである。この願いを受けて、この願いにそって生きる。地獄は戦争であり、餓鬼は飢えた世界であり、畜生は差別の世界である。戦争をなくし、飢えを克服し、平等な人間関係を構築していく。それが本願に生きる念仏者の生き方であるとする。

しかし宗教の本質は、有限者である人が、無限者（仏・神）と接触し、主体化されていた自我が転換し、無限者が人の主体となっていくこと（摂取不捨の利益）である。その上で、社会の変革を願って生きようとするのを真実の宗教（真宗）という。その場合、未だ主体の転換はなされていないが、主体の転換を願いつつ、社会の変革を願って生きようとするのも宗教の道であることは言うまでもない。

ただ、自我における主体の転換を求めず、社会の変革を願って生きかつ行動していくこともできる。その場合はヒューマニズムとか理想主義あるいは社会倫理といえるが、宗教（真宗）とは言えない。真宗信心の本質は阿弥陀とのあいによる主体の転換であることを忘れてはならない。

ると云うことは、相手を愛する心がないからである。「汝の敵を愛せよ」というバイブルの言葉があるが、心に広い愛情があるなら、その人には憎むべき人も怨むべき人もいないはずである。

すると「人を愛することのできない苦」は怨憎会苦と質が等しい。他者を広く愛する心がないと、人と自分との間に対立とまで言わなくても、距離感や溝や隔てる心ができる。それがあると、利害損得や人間関係などの縁で、人と対立する心になり、やがて人を怨んだり憎んだりすることになる。

私は人を愛する心が乏しいことに悩み続けたのであるから、怨憎会苦の苦を持ち続けたことになる。また怨憎会苦を広く解せば、好ましくない事柄にであうと、それを嫌悪する苦も入ろう。

次に求不得苦、これは求めても得られない苦。人生生活はいつでも「何かを求めつつある生活」であるから、当然、得られない不足、不満が大なり小なり起こる。そうい

う意味で求不得苦は普遍的な苦とも言えよう。人の一生は、欲求と不足の苦とが織りなす巻物である。

自分の努力だけでは自分に都合の良いものを得られない不足や怖れから、人は神仏に祈願してまでそれを得ようとする。多くの神仏への祈願はこれに起因している。

ただ、社会的正義を求める場合、それが実現しないばかりか、それに反する方向に進むと、悩まざるを得ない。たとえば、原発はすぐにでもなくしたいと思っても、政府の政策は原発を容認する方向へ進むなら、求める理想は遠のいていくという苦しみが起こる。

しかしこういう苦は求不得苦には入らないであろう。求不得苦は自分の我欲我愛に起因する苦しみの場合に起こる苦についていわれるのである。

五蘊盛苦は、肉体（色蘊）と、感覚（受蘊）や表象（想蘊）、意思（行蘊）や識別（識蘊）などの心の働き、そういう身心の機能（五蘊）が活発であり、敏感であると、何か

につけて苦痛を感じる。

見たり、聴いたり、触れたり、臭つたり、そういう感覚が敏感で盛んであると、外からの色んな刺激に振り回されて心が落ち着かない。そういう苦が五蘊盛苦であろう。

この中で一番典型的なのが、性欲が旺盛であるときの苦であろう。五蘊が旺盛になると、生の活動が活発になる。

生の旺盛は性の旺盛になりやすい。そうすると『仏説無量寿経』に説かれているように「姪姪を念いて煩い胸の中に満てり。愛欲交乱して坐起安からず」

（みだらなことばかり考えて、悶々と思ひ悩み、愛欲の心が入り乱れて、何をしても安まることがない）という風になり、「坐起安からず」で、心がいつも落ち着かず、大きな煩いとなる。ことに青年期に顕著である。

凡夫は四苦八苦の中で生きる外はない。こうした苦を少なくしようと思えば、過ぎた欲望を少なくすれば、当然苦は減ってくる。しかし、過ぎた欲望を少なくするのも難しいが、四苦八苦の元である「我と我が身」に執着する我執

我愛の心、それは凡夫の人生に深く密着しているので、これを離れることは不可能といつてもいい。

（法蔵菩薩は凡夫のこの有様を観察し、「色・声・香・味・触の法に着」しない修行を私たちに代わって修して下さった。そしてその功德を南無阿弥陀仏に成就して私たちに与えて下さる）

仏法を敬い、念佛聞法するところに、こうした四苦八苦の人生の中にあつて苦しみ悩みを離れられない私の心に、阿弥陀仏の慈悲心が届いて信心となつて下さる。

そこに、苦海の人生を阿弥陀仏の慈悲に包まれながら渡らせていただく。南無阿弥陀仏は四苦八苦の人生を生き抜く力となつて下さるのである。

念仏者松並松五郎さんの歌

苦しみ悩みの奥底に
縁なき魂に湧く水は

口に聞こえる南無阿弥陀仏

山道谷底とげの道

強く生きぬく力こそ

口に聞こえる南無阿弥陀仏
とある。（了）

正信偈に学ぶ同答

(六十)

還来生死輪転家

決以疑情為所止

速入寂靜無為樂

必以信心為能入

(書き下し) 生死輪転しじょうりんてんの家に還来げんらいすることは、決するに疑情をもつて所止とす。速すみやかに寂靜無為じやくじやうみゑの樂みやくに入ることは、必ず信心をもつて能入とす、といえり。

(意訳) 「迷いの世界に輪廻りんねし続けるのは、本願を疑いからうからである。速やかにさとの世界に入るには、ただ本願を信じるより他はない」と法然聖人は述べられた。

*

N 「(生死輪転の家げんらいに還来する)とは」

D 「生死輪転の家とは生まれ変わり死に変わり流れ転がつていくことで、サムサーラといひます。いわゆる輪廻りんねとか流転りゅうてんということで、迷いの世界を移り変わっていくことで、そういう領域にいつまでも行き来することです」

N 「迷いの世界をへめぐつてしまうことですね。それはへ決するに疑情をもつて所止とす」で、本願を疑うから迷いの世界に留まるのだといわれるのですね」

D 「ええそうです。生死流転し続けるのは弥陀の本願を疑うからであつて、私たちの悪が深いからでもなければ、修行をしないからでもなければ、人間性が劣っているからではなくて、ただただへタスケルで、念佛申せ」とまで仰せ下さる阿弥陀仏の大悲の心をはねつけてきたからだと言せられるのです」

N 「ところで、生まれ変わりに死に変わるといふサムサーラ(輪廻)を信じるのは難しいですね」

D 「初めは信じられなくてもいいのです。輪廻を信じられなくても、私の行く末を阿弥陀仏が全面的に引き受けて下さつて、必ず幸せにすると仰せ下さっている本願を受け入れることはできます」

N 「まず、へタスケルで、念佛申せ」と仰せ下さる阿弥陀仏の大悲に身をゆだねることが大事だと」

D 「ええそうです。阿弥陀仏の仰せに順うと、不思議にも私たちは大変樂になります。樂になりますと佛のお言葉は本當なんだなど、仏語に対する深い信頼が生まれます。仏のお言葉にウソはないと信頼されてくると、サムサーラということも本當なんだろうなと次第に受け入れられてくるのです」

N 「本願を信じた後、生死輪廻ということも受け入れられるようになるのですね」

D 「ええ、ですから初めからサムサーラは信じられなくても、阿弥陀仏に身をゆだねる時、人の心は阿弥陀仏のお心に摂め取られますから、救いはその時に実現し、阿弥陀仏と離れなくなります。そうするとへ仏語に虚妄こもつなし」という信頼ができてきます」

N 「サムサーラに関してですが、迷っているかぎり衆生は死んで生まれ、生まれては死ぬというへサムサーラ」以外に、人は死ぬとどうなるかと外では説かれていますか」

D 「詳しくは知りませんが、

大きく分けますと、人は死んだら無になる、骨と灰になつておしまいという唯物論。また死んでも靈魂は不滅で続いていつて、この世の終末に最後の審判を待つというキリスト教やイスラム教があります。ヒンズー教はサムサーラの考えです。それ以外に死後のさまざまな冥界が説かれたりします」

N 「次ぎにへ速やかに寂靜無為の樂に入ることは」とは」

D 「寂靜無為の樂とは極樂浄土の世界で、この世が終われば直ぐに、煩惱の消えた(寂靜)、智慧と慈悲の安らかで常住(無為)の領域であるお浄土に入る、ということですよ」

N 「それはへ必ず信心をもつて能入とす」で、本願を信じる信心でもって入ることができるとは」

D 「ええそうです。要するに弥陀の本願を疑うなら生死流転の領域に留まり続け、本願を信じる人はこの世かぎりです。安らかな悟りの領域である浄土に入ることができるとの仰せです」

N 「浄土にゆくか苦しみの領域に留まるかは弥陀の本願を信じるか疑うかなのですね」

D 「ええそうです。真つ暗な海に漂ただよい続けている人がいて、そこに大きな助け船が来てへさあこの船に乗れよ、安全な岸に運ぶから」と言われて、それに乗るか乗らないかのようなものです」

N 「阿弥陀佛の本願の船に乗りさえすればいいのですね」

D 「ええそうです」

N 「ではどうしたら乗ることができまスカ」

D 「へ自分の力では行く末は開けない」と、自分の力を見限り、今南無阿弥陀仏と称えしめられ、耳に聴かしめられているお念仏の仰せ、すなわちへそのままを引き受ける」の如来大悲の仰せを、へこんな私のためでしたか」と聞き入れる、それが本願の船に乗ったことに自然になるのです」

N 「阿弥陀仏の大慈大悲の念仏はこんな私のためでしたかと、聞くばかりなのですか」

D 「ええそうです。すると阿弥陀仏のお心が私の心に届いて下さるのです」

N 「それが阿弥陀仏の願船に乗るといふことなのですか」

D 「ええそうです」(了)

木村無相さんの法信⑬

(昭和五十八年七月十六日の木村無相さんから私へのお手紙)

昭和五十八年七月十六日(土)夜、八時十五分、和上苑、自室にて。仰臥無相

紀さん……

このごろ「目」と「モノワスレ」とても、ヒドクなつて、書いて出したようにも思われ、書かなかつたようにも思われるので、重々複、かもしれないが、書きます。気にかかる、ネットカレないから。ラジオ放送の題は「煩惱とわたし」とのこと、書きましたかね。今日、NHKから、〈現金書留〉で手紙下さり、放送料、再放送料を送ってくれました。放送しないうちに。

近いうち、カセットテープ、送ってくれるというので、なんとか聞きたいと思つて。話のドコを、ドンナ風に30分にまとめてくれたか知りたく、又、自分の声をききたいので。

話は「煩惱とわたし」という題で大体わかります。

〈極重悪人唯称仏〉

〈ただ念仏してミダに助けられまいらすべし〉

というところでないかと。

さて、紀さんの手紙の

ただ念仏してミダに助けられまいらすべ

しと一直線に歩ませていただきます。たとえ多くの人がそれを真宗でないと云われるとも。

と言っていることは、これを〈一心一向〉という。

〈と信じて念佛申さんとおもい立つころのおこる〉

であり、

〈弥陀をタノム〉〈信ずる〉〈本願にスガル〉〈本願念佛にまかせる〉〈ハカライなし〉

等々の、一切が

「一直線に」

の中に、オノズカラ、全分にふくまれて

いることゆえ、

〈一直線に歩む〉以外に、

〈本願をタノムとは?〉

〈信ずるとは?〉

〈マカセルとか?〉
というような、疑心を持つ必要はさらになしです。

ただ念佛で一直線歩むだけです。

ただ念佛

そのほかに、ナニもいらぬのです。

一切のハカライもオノヅから念佛が、とかしてしまふからです。

ハカライもウタガイも、一切、気にする必要なし。

気にしてもナムアマダブツ、気にしなくてもナムアマダブツ、一切、ただ念佛

のホカなしです。

○

題しませたか気になるので書きました。もうねます。ナム、ナム、ナム、ナム、ナム、八時半、合掌

ナニカを御縁に、ただただ称うるばかり

ただ念仏

ただ念仏

ただ念仏

ただ念仏

(了)

松並松五郎さんの言葉

*博多の万行寺さん(七里恒順師)が「男猫が子を産んだんで、忙しうて忙しうて」といわれたまま、奥へ行かれて、出てこられなんだという話があるが、男猫が子を産んだぐらいではありませんが、足があるから足に合せて足袋ができた、あんたや私がいるからあんたや私のための南無阿弥陀仏ができた。だったらあんたやわたしが南無阿弥陀仏を生んだんや。

*富山の方たちと一・二時間念佛する。

ある人が私に(松並さん)に

「教人信はどうなりますか」

と尋ねた。

「私は自信だけで教人信はありません」。

*私の業道を歩むまが、仏様の大願業力の中にある、一つや。

*あわずとも
またうつさずとも
あいにくる
日々夜々に
ねやの中まで

*その心はそのままにて、それを見込んで、お前にせよといわれたらできんで、入り用のものはみんなとのえて、南無阿弥陀仏の中に封じ込めて、聞即信南無阿弥陀仏のいわれを聞かせてもろうた端的に、それがみなもらえるんじや、もらいもんだけでいい。

*後生まで救う仏さんが、娑婆五十年ぐらいのこと、朝飯前や。

*娑婆のことは宿業のあらわれやから仕方がないが、道にかなうと、取られていくというか、刈り取られていくというか、だんだん減る。

*仏の力で、仏の慈悲でやつと今のわれわれやろ。なまじ人間の薄っぺらい感情やなさけで届くものでない。

*南無阿弥陀仏は妙薬だから、飲んだら妙薬やから、飲めば飲むほど効き目があるわられる。飲み過ぎるといふことはない。飲むといふことは念佛すること。

*阿弥陀さんのいのちに帰るとは名に帰ること。

*遠くて近きは

のりの道

喚びますみ声は新しく

南無阿弥陀仏と聞こえたり